2018年
新年号
第194号

飛鳥 かわら版

ASUKA KAWARABAN

発行所
飛鳥出版室
発行人　永野　正将
〒780-0945 高知市本宮町65-6
電話　088-850-0588
e-mail:info@asuka-net.jp
http://www.asuka-net.jp

あけましておめでとうございます。

旧年中はご愛顧賜り誠にありがとうございました。

昨年は「飛鳥かわら版」を沢山の皆様に楽しみにしていただいたにも関わらず1度しかお届けができなかった事を心よりお詫び申し上げます。本年は通常通り発行ができるよう努めてまいります。

さて、2018年がスタートしました。私どももこれまで同様に、印刷、出版事業を基盤として、従業員一同お客様にとってより良いサービスをご提供できるよう日々研鑽してまいります。

その一つとして「映像制作」にも力を入れ、紙媒体はもちろん、AR（拡張現実）からWEBサイト、そしてYouTubeなどの映像という一連の流れを想定したプロモーションにも力を入れてまいります。

本年も飛鳥をどうぞよろしくお願い申し上げます。

株式会社　飛鳥
代表取締役　永野　正将

文旦好きがこうじて……松田雅子　2
新聞余話⑤　……大澤重人　4
キルギスタンからコンニチハ ⑦⓪ ……氏原名美　5
おのころじま奮染記 12 ……田島征彦　6
出版物紹介……　7
わが家の太郎 ㊶ ……永野雅子　8

「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。

『文旦好きがこうじて』出版秘話

著者：松田雅子

土佐学協会の「土佐の酢みかん文化を楽しむ会」では酢みかんを、「土佐の郷土料理を楽しむ会」では郷土野菜を、そして「トマトサミット」の立ち上げからはトマトのことについて、いろんな場面で取材・執筆してきました。

ところが、生まれて初めて癌検診でひっかかってしまい、再検査を2回繰り返すという段になって、「まだ文旦書いてないきーーーーー!!」と、信じられない焦りとパワーで生まれたのが、この本でした。病院の待合室でも、首を折り曲げながら、台割り作業や執筆に取り組んでいたのは、今振り返ってみると、もしかしたら「好きな物で頭をいっぱいにして、少しでも恐怖から逃れよう」としていたのかもしれません。最終的に身体の方も大事に至らず、生かしていただけることになってからは、とにかく1日1日が愛おしく、文旦を剥く時間も例年より特別なものになったような気がいたします。

出版後は、ムキムキ仲間たちとの「出版記念イベント」も好評で、お陰様で、金高堂書店でベストセラー1位（上半期の販売数でも4位）をいただくことができました。その後、和歌山県で開催された「みかんサミット」に呼んでいただけたり、今年2月、東京のアンテナショップやタカノフルーツパーラー新宿本店で、ムキムキイベントをさせていただくことが決まったり、ワクワクすることが続いています。

「本だけ送っても、そこに実際に剥ける、美味しい文旦がなければ意味がない。まだ本当の意味で『土佐文旦』の魅力をご存知ない県外の方が、文旦の美味しさ&ムキムキの楽しさが分かったら、必ずリピーターになってくださるはず！本とムッキーちゃん、文旦ムキムキSETができんろうかねえ」はりまや市の谷ひろこさんのご要望を、春にはなんとか形にすることもできそうです。

まだまだこの先もいろんな人生のピンチが訪れると思いますが、今回の出来事を思い出し、乗り越えられたらな…と思います。

飛鳥出版室さんに的確なアドバイスをいただき、お陰様で素敵な本が仕上がりました。

◀金高堂書店本店（チェントロ前）での「出版記念ムキムキイベント」の様子。

B判変形 56頁　定価 1,500円+税
お求めは
金高堂書店各店、宮脇書店（高須店、イオンモール高知店）高知市近郊のTSUTAYA書店各店へ。
直接郵送をご希望の方は、当社書籍担当までお問い合わせください。
インターネットでもお求め頂けます。

イラストレーターの畠中智恵子さんのイラストが、「届いて嬉しい気分」にさせてくれる「文旦ムキムキSet」。1月27日より、露地文旦3個+ムッキーちゃん1個+「文旦好きがこうじて」1冊が入って3,500円。
ご予約は
korisu@lime.ocn.ne.jp
まで。

新聞余話 ⑤　大澤 重人

クロスチェック

先日、韓国の盧武鉉（ノ・ムヒョン）元大統領（一九四六～二〇〇九）をモデルにした韓国映画「弁護人」を見ました。演技派のソン・ガンホさん主演の秀作です。

ただ残念なシーンもありました。権力の不正に一人で闘う主人公に、新聞記者をしている学生時代の同級生が援護する記事を書いた場面です。デスクに渡そうとして邪険にされ、場面は翌朝に。その記者が朝刊を開き、ボツにされていることに気づきます。無念さが伝わる演出ですが、翌朝に紙面を開くまで記事が載るかどうかわからないなんて……。

たとえば、映画のような記事を高知支局の記者が書いたとしましょう。各方面に取材して書き上げた原稿を支局のデスクに出します。

ニュース価値があるかどうか、事実関係の裏が取れているか。支局デスクは疑問点や不明な点を記者に根掘り葉掘り問いただし、追加取材を命じます。どれくらい細かく聞くか。道路に飛び出した鶏を避けようとして事故になり、あるデスクが「その鶏は雄か雌か」と問いただしたという逸話があるくらいです。

デスクは必要な要素を加え、わかりにくい表現は改め、無駄なところは削ります。記事の署名はあくまで執筆記者ですが、ときには原型がほぼないことさえあります。デスクは書き直した原稿を記者に送り返し、チェックさせます。リライトで事実と異なる記述になってしまうといけないからです。

地域面の場合はこれで出稿されますが、より多くの読者が読む全国版の場合、この原稿をさらに本社のデスクがチェックします。別の目で見て過不足や疑問点を精査し、支局に問い合わせや注文をします。たとえば、「他府県の事例を調べて書き込んでくれ」「公平な目で見るために専門家の談話がほしい」――など。記者は再び補強や追加取材に追われます。

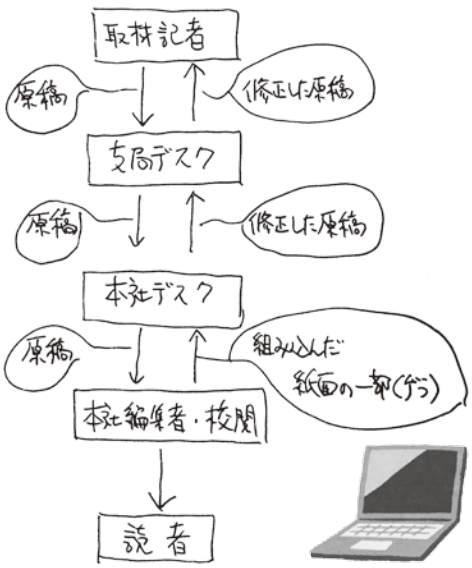
それらを盛り込んで本社デスクが再修正した原稿が支局に送り返されます。支局デスクと記者がそれを確認し、OKもしくは直しを書き込んで本社に送ります。

記事を組み付けた紙面ゲラが出来上がると、本社からFAXで支局へ。それを記者はまたチェックします。紙面のスペースは限られているので、編集段階で記事の一部が削られることもあります。見出しは記者ではなく、編集者がつけるので、記事の意図が反映されているかどうかも点検しなくてはいけません。支局とは別に、本社では事実関係などを調べる校閲記者の目も入ります。

紙面は、印刷工場からの距離によって複数の版があるので、版が変わると組み方や見出しが変更になることがあります。その都度、ゲラが送られてきます。深夜、帰宅後にスマホを通じてゲラのFAXを受け取ることもあります。この何度もの行ったり来たりを繰り返して、一つの記事が掲載されるのです。

映画の場面のおかしさが伝わったでしょうか。怖いのは、何人もの目で何重ものチェックをしてもミスをすることがあることです。

図 原稿の流れ



おおざわ・しげと
毎日新聞大津支局兼地方部エリア編集委員。高知支局に支局長、次長として計五年半勤務した。最新刊『泣くのはあした―従軍看護婦、九五歳の歩跡』で第26回高知出版学術賞特別賞受賞。

キルギスタンからコンニチハ ⑦⓪

行く年来る年、母を送る

氏原名美

うじはら・なみ
高岡郡越知町生まれ。北大でロシア語を学ぶ。2001年からキルギス在。国立ビシケク人文大学日本語日本文学科学科長。

祖父は血圧が高く、晩年は脳梗塞の後遺症で杖をついていた。結局、三度目の脳出血で亡くなった。その息子である私の父も親譲りの高血圧だったので、実際には肝硬変による動脈瘤破裂で亡くなったのだが、生前は「俺も死ぬのは脳溢血」が口癖だった。父方一族の病歴という「伝統」から、我が家の認識では 高血圧なら脳出血と決めてかかっていた。

だから、まさか母が脳卒中で亡くなるとは我々姉弟は思ってもみなかった。母は若い時から血圧が低く、七十過ぎても八十を越しても高血圧症とは無縁、検査のたびに嬉しそうに「栄養満点の血液だと言われた」と話していた。

本人も周りも、どんなに血液が栄養面で立派でも年相応に血管は古くなっていれば危ないということに気づかなかった。くも膜下出血を起こす動脈瘤は高血圧とは直接関係がないのだそうだ。ほんの少しの血圧上昇でも、もろくなった血管の動脈瘤はポンと裂けてしまうというから怖い。

思えば、動きが鈍くなった老人一人世帯では危ないからと母は灯油ストーブの使用をやめたのだが、電気ストーブだけでは実に心許なかった。冬は油断大敵、特にこの冬は南国高知として珍しく冷え込みが続いていたのに、急激な温度変化が血管にどう影響するのか全く忘れていた。

・・・・・・

母は二十六日に倒れ、その翌日に息を引き取った。母に感謝したいことは山ほどある。中でもいつもありがたいと思っていたのは、私が次々と日本に送り出してきた教え子たちを「またキルギスの孫が増えた」と言いながら、日本での成長を楽しみにしてくれたことだ。教え子たちも母のことをバーブシュカ・カズコ（和子おばあちゃん）と、今でも慕ってくれる。日本留学を終えたらほとんどが国に帰るのだが、中には日本で活動しているものや子育て中の「キルギスの孫」もいる。

毎年十二月も下旬になると、日本在住のキルギスの孫たちから「美味しいミカンをありがとうございました」と山北ミカンの礼が届き、二十四日には孫たちがバーブシュカの誕生日を祝ってくれる。メールは日本からもキルギスからも届く。母はそんないつも通りの十二月を過ごしていた。二十四日のメール返信には「満八十五歳は四捨五入で九十歳」とあった。

たとえ身内の不幸でも周囲にしわ寄せが行くような休みかたはしない、というのが母の信条だった。大学時代曽祖母が亡くなった時には「学業を措いて駆けつけてもひいばあちゃんは喜ばない」と言われた。十二年前に父が亡くなったのがキルギスでは初めてうちの大学に本格的な日本語日本文学研究室が開設されて最初の学年度末だったため、母に「仕事を放り出したりするな」と釘を刺された。

・・・・・・

父の時とは違って母の葬儀には私も間に合い、子も孫もひ孫も、いとこも甥も姪も、みな揃うことができた。日本もキルギスも職場は年末年始、特別に休みを取る必要はないし世間様にも申し訳が立つ、とでも踏んだのだろうか。母は、何事も早めに計画を立て、予定通りにことを進めてきた。自分の行き方を貫いて、人生の幕引きも見事だった。

日本国内からもキルギスからも、母を悼んでキルギスの孫たちが次々と連絡をくれる。私はキルギスの娘や息子に慰められている。

二〇一七年大晦日記

ビシケク人文大学日本語日本文学講座
https://japanesephilology-bhu.jimdo.com

おのころじま染織奮闘記

ふんせんき

田島征彦

12. オムライス街道 絵本コンクール①

絵本コンクールの審査員になってくれという依頼があった。高岡郡日高村役場が募集する絵本コンクールだ。テーマはオムライスである。日高村はシュガートマトの生産地で、そのトマトを使ったオムライスが評判を呼んでいる。いの町と佐川町の間の国道筋には、オムライスを出す食堂が11店舗あり、まさにオムライス街道となっている。二〇一五年には、オムライス全国大会!で、日高村は準優勝を勝ち取っている。

ぼくは、高知からの依頼は、できるだけ引き受けているから、あんまり深い考えもなく引き受けた。その後、少し不安になってきたのは、日高村産業環境課、主幹の女性Yさんから丁寧な手紙をもらったことからであった。Yさんは幼い時から絵本が好きで、特に「ホットケーキをつくろう」という絵本をくり返し読んでもらっていた。母親になった現在は、その絵本で、お子さんと一緒にホットケーキを楽しく焼いているとのこと。だから、日高村をオムライスでアピールするために絵本コンクールを思いついたのだ。

「ホットケーキをつくろう」は50年以上前から大ヒットでロングセラーの絵本である。書店の絵本コーナーには、こうした幼児向けの絵本がたくさん並んでいる。実はぼくが創った絵本も一冊だけ、そうした人気絵本と一緒に並んでいる。「じごくのそうべえ」だ。

この絵本は、古典落語を下敷きにしていて、けっこう、幼児には理解されない言葉が、たくさん使われている。始まりの台詞から、「とざい　とうざい。かるわざしのそうべえ。いっせいちだいのかるわざでござあい」

軽業師・一世一代　それに人呑鬼・疝気筋など数えればキリがないほど、幼児、子供に理解できるはずのない言葉が出てくる。しかし、幼稚園や保育園で劇にして演じてくれていて、今でも「ぼくは保育園の時、医者のちくあんの役をやりましたよ」と嬉しそうに話しかけてくる40代のオンチャンに会うことがよくある。

ぼくが面白くて、笑いながら描いた絵本が幼児から大人まで面白がってくれている。もちろん、ぼくの他の絵本も、子供・大人を問わず、少ないだろうが、ファンがある。

そうした絵本創りは「ホットケーキをつくろう」とは全く異うのだ。（他の絵本作家を排撃しているのでは、決してない。）

しかし、ぼくが幼児向けの絵本作家と間違っている人たちが多いのは、「じごくのそうべえ」の他の絵本を見てくれないからだろう。

日高村役場のYさんたちも、ひょっとしてそんな一人ではないだろうかと、心配になったのだった。

（つづく）

たじま・ゆきひこ（染色家・絵本作家）
大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染織図案科専攻科修了。一九七八年『じごくのそうべえ』で第一回絵本にっぽん賞。最新作『ふしぎなともだち』で第二十回日本絵本大賞。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名

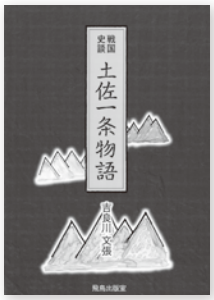
出版物紹介

句集　寒椿

岩井 あき・著
B6判 250頁
並製本

20年前に夫を亡くした著者は友人の勧めで俳句を始めました。
それまでは夫の仕事の関係で、経理、家事、父母の世話に明け暮れ、俳句とは縁遠い生活でした。師の懇切丁寧な指導や、吟行の旅などを通じて、草木や自然を見る目、小さな虫等、物を見る目が変わってきたと言います。
亡き夫の遺した画帳から、椿の花の点描画を巻表紙に、各章の扉にも絵を配して、夫婦合作の温もりのある本に仕上がっています。

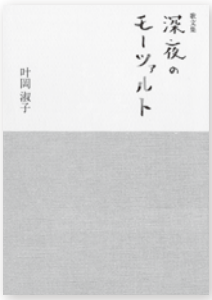
土佐一条物語



吉良川 文張・著
B6判 198頁
並製本

土佐の戦国は「応仁の乱」から長曽我部元親が土佐を統一するまで107年続きます。
その間、押領された荘園をとり返そうと一条教房が幡多に下向して土佐一条の礎を築き、91年後の天正13年四代目・兼定の死によって滅亡します。
この史実を、様々な文献を元に推理・推論などを加えて物語として書き下ろした郷土の歴史書です。

深夜のモーツァルト



叶岡 淑子・著
A5判 288頁
糸かかり上製本

2001年、「海風短歌会」に入会した著者が、短歌を通してご自分の生きた時代の道のりを二部構成で、二〇〇七年から一〇年間発表した小論・エッセイを第三部として収録。
戦中・戦後を体験した著者が、現状を憂い、平和を願い、来し方を想う文章や短歌、夫の病と死、我が身の老いに向きあう切なる気持ちが迫ってきます。
ひたむきに戦中戦後を歩み来し
残生かけてこの道をゆく
もう一度聴かせてあなたのハーモニカ「荒城の月」あの日のやうに

気まぐれ喫茶店

中内 惠子・著
B6判 198頁
糸かかり上製本

コーヒー好きの著者が、30年の間に折々に綴ったエッセーを纏めたもの。
コーヒー一杯から話題が生まれ、心の通いが生じ、時の経過と共に人との和が増える。自宅のことを「気まぐれ喫茶店」と称して友を招く。
古希を迎えた著者が自分の生きてきた記録と、残りの人生をどう歩むかを季節の移ろいとともにあれこれ想像する。
一人の女性の自分史でありながら、同世代の共感を呼ぶ、ほのぼのとした1冊。

野の花のように

前田 幸子・著
A5判 96頁
並製本

著者の前田幸子さんは80歳を過ぎて、坂本龍馬記念館の前館長森健志郎氏の勧めで俳句を始める。「藍生高知『かんざし句会』」にも参加するなど、米寿を迎えてなお瑞々しい感性で創作している。そんな句を家族との想い出や大好きな野の花の写真とともにまとめられた1冊。巻末に親交のある作家の山本一力さんが「野の花強し、幸子　さらに強し。」とメッセージを送っている。

◇

亡き夫の墓前にさしゝ百合ほのか
福寿草松蔭に咲き春を告ぐ
風光るいづこもなく花かをり

わが家の太郎 41

加齢

永野　雅子

今年は戌年、「わが家の太郎」を書き始めて十二年になる。

太郎もすっかりおじいちゃんになった。最近は白内障で、大好きな元気ガムが見えないらしく、目の前に置いても分からない。

お医者様に聞くと「散歩中に電柱にぶつかったり、溝に落ちることがなければ良いにしましょう」とのこと。私はというと、突然膝が痛くなって、階段を這うように上がったり絨毯につまずいたり。こちらもお医者様から「加齢からくるものです。」

太郎共々老々の身。お互いいたわりながらこの先如何に長持ちさせるかなどと考える。

そこへ正月休暇で東京から息子が帰ってきた。

しめ飾りを付けたり、ドアの不具合を直してくれたり、暮の買物に付き合って重いものを持ってくれたり、なんとありがたいことと幸せを噛み締める。

元日には総勢十二名がわが家に集まってお正月。孫達もそれぞれ大きくなって、上は高校生なのにわが家に来ると童心に返るのか、小さい孫たちと鬼ごっこ、ダンボールの家づくりと大騒ぎ。

さすがに二日は疲れもピーク、言いたくないけど「歳かなあ」。

息子と朝食のとき、

「おふくろもいつまでも一人暮らしは無理やろう。そろそろ考えんとね」

「ありがとう。まだ大丈夫よ」

そこまでは良かった。雑煮のお餅を食べて、食後のヨーグルトに手作りのりんごジャムを入れていると、

「ちょっと！多すぎ、その半分で上等、大体食べ過ぎよ」

と、言われる。

「私はこうして食べるから元気ながよ。一々言わんとって」

「年齢を考えてみいや」

だんだん険悪ムードになる。

さんぽは・・よ…

私の体を気遣って言ってくれることはわかるけど、一緒に暮らしたらこれを毎日聞かねばならぬ。

太郎のごはんを持って行くのに縁側の境の戸を開けっ放しにしていると、いつの間にか閉められていて、両手が塞がっているのに、もうっ！

夫が逝って七年、すっかり気ままなひとり暮らしに慣れて、わがままになっているのだろうけど、この自由な快適さを手放す気はさらさら無い。

それには、皆に迷惑をかけないように元気でいなければ…。やっぱり、息子の言うように食事制限も必要かなあと、大好きなお餅を目の前にして考える。川柳に

「痩せてやる　これを食べてから痩せてやる」

というのがあったけど、ま、いいか、その分太郎と散歩に行って消化してこようっと。

ながの・まさこ／飛鳥常務取締役

ざつがき

▼八三歳父がなくなりました。二年前に動脈瘤を、その後脳梗塞を併発。それまでは米をつくり、文旦をつくり、夏は大好きな鮎釣り、と自由に過ごしていた父が突然車いす生活に。口下手な人でしたが、大好きな鮎の話をすると嬉しそうにポツポツ話してくれました。元気だったんですよ。「又ね」って声をかけたのが最後になりました。四人の子どもたちを育ててくれました父に感謝し、まだ実感は全くありませんが、安らかに眠りにつけますよう祈ります。（中）

▼社内のコミュニケーションを図る為、社長の提案で始まった「シャッフルランチ」今年で五年目突入。毎月メンバーを入れ替えながら「何食べたい？」「どこいく？」「それともお取り寄せする？」「肉系？」「お寿司？」私は？といえばあまり食にこだわりがない。なんでもいい？いや、チーズはだめです。○○もダメ。アレレ。（西）